慈恵

両大師傳記

一

教林文庫
文庫7
169
1

文庫7
169
1

東叡山藏板

元三
慈眼
兩大師傳記

全五冊

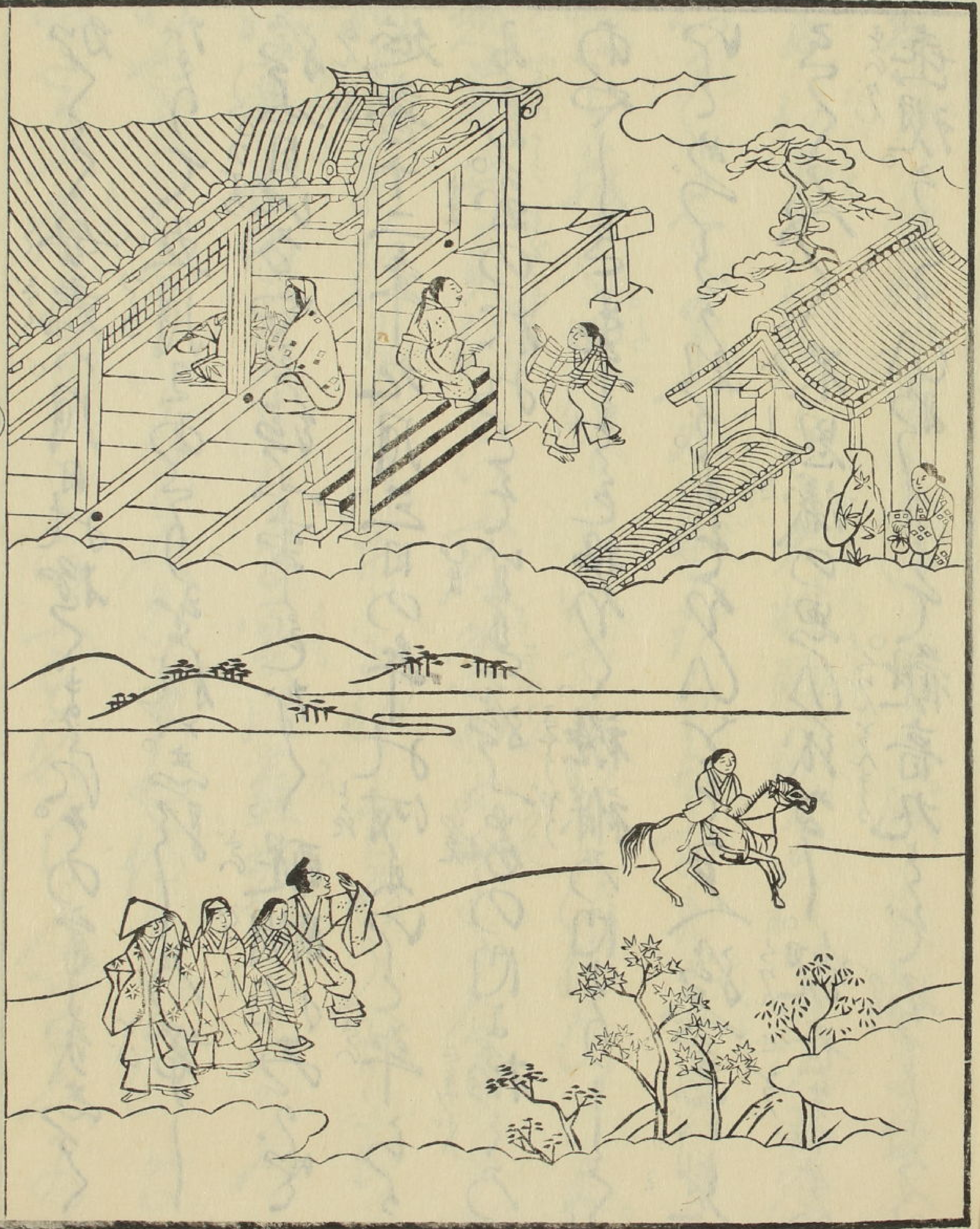
早稲田大学図書館藏書

東叡山寛永寺元三大師縁起上

觀其音聲乃春の風を二求兩願の林より吹紀。普門示現の秋乃月ハ七難苦厄の水にうつくし。諸佛乃濟度薩埵の利生さ廣くなき事ハ大悲乃ちかひしく。弘誓の旨趣ふかし。わけが中に。觀音大士の御めぐミことに。こゝろあつく値遇志するもの世にあふごとく靈驗他よりも絶へず。慈恵大師の御本地をうかゞへば。如意輪觀音にてかりに凡身を現じ。

衆生三毒の払除し給ふ。いまもその種々く
の智用をあらハし。名八嶋の外まで遍くなり給。
徳化乃海ハ末まで不涸く。霊験今に
いたるまでいちじるく。されバ此や貴賤おしなべ
なく。うやまひ尊む事ハさらなれ。しかるかの
降神の地をたづぬれバ。近江乃国浅井の郡
とかん。父ハ木津氏母ハ物部氏とぞ申し
母ぎみ。御子ゆるせぬ事祈。朝夕怠りなく
祈りて居れし郡のうちに。大吉寺とくその

いふ。安然和尚草創乃精舎あり。湖水より湧
出し給ふ。観音の尊像を安置なし奉り。人々
祈をかくるに。所願むなしからざれバ。便生福
徳の利ひありませて。この寺に詣で。丹祈
し給ふ。かくて三七日満ずる夜の夢に。いと
うるハしき翁あらハれ。さやかなる白馬に乗りて来
寺に入りて後見てのたまハく。所願成就せん。
嘉瑞なりとよろこびて。ほどなくくわいにんし給ふ。その
夜の夢に。海の中に座し。天上にむかひ声



よ。日のもとを懐よりいるゝ見給へは。ゆかぬ。其より
あら地ゆくすらぬ満身地かし宮殿とも

かくて母君ハ月日のたつまゝにその身たゞならず
なりて五月にあたりければ志ありし乃帯し
給ふ日なりやうに給ふ事もなく醍醐のみかど
延喜十二年九月三日の午の時にいと平らか
なる玉のおのこそ生れ給ふ家の門に様々の
あやしき事どもありて禎祥乃門よりしるく
いとめづらかなりけるをひとゝ人給ふをは見
きくみな不思議の思ひをなし観世音の
垂現なりとてひめしとて観音丸とぞ号しける

年月過ぎて給ふにいとゞくおとなしく
ならせ給ふ何事もはかく天性聡明なれば生ひさきも
たのもしく見えてはや九歳になりませ給ふ友なら
かくて給ふ国津よいでてわがそび給ひしに
越前守貞行といふ人祭田にかくかありしに
河まさにあるいは井によるをうへにはら
紅蓮華のごとくなる雲の蓋かゝりけるのみ
あやしくいかなる人ぞやとひかば
志ある者志かりしもとをれいら人をそへて

家にとゞむ。其の児童人にあらじ。かゝるさとる
るすなりけれど。いひはやしけるをきゝそれより後ぞ
ほふ名ひでらし天より宝物あり。地六種に
ふるまり。天華紛々たる人は虚空にたちて雲に乗と
あるまち地動とこそなれ。婦らぬ嵐にまじく飛花
楷りをこそ年月多く過ぎぬ。いよく比丘の
桐あるを枕にかくれたりしやうらむ。しづくろ
聞しけのんどひけり。世の井は事をはなれて。
家の内にもいりしきれば珠数を神を内に

さ海よく知ふしきそん事なり。なるひとゝ云紙
かしこ故郷の近ふかくなるみまり
ぬまと八母君とたのみ此里よりまりすき給ふ
梵の里に梵釈寺覺恵とふ人あり洪児の
そそ得ひとみゆく千人にすぐれたるにおはしき。
かくあれこそ人によるかしそへんいへとあるにしも我
るすなり。いつか碩徳の人にとこそなりたきもの
させ給へとぞいはれしとなん

延長元年五月三日御年十二歳にして。天台山にのぼり給ふ。日灯上人が房に住し理仙大徳を師として法門を習ひ六年に難渋し給ふ生知安行にして学渉三多旨擬一實に不悟なく教に不通といふ事なかし。ふくきよく徳人給へり。理仙入寂給へば、いよいよ悲しみの涙にくれ給ふ事かぎりなし。志ア給ふ三条の右大臣殿乃從方公家司伊賀守良見といふ人あまなる日灯と友にして

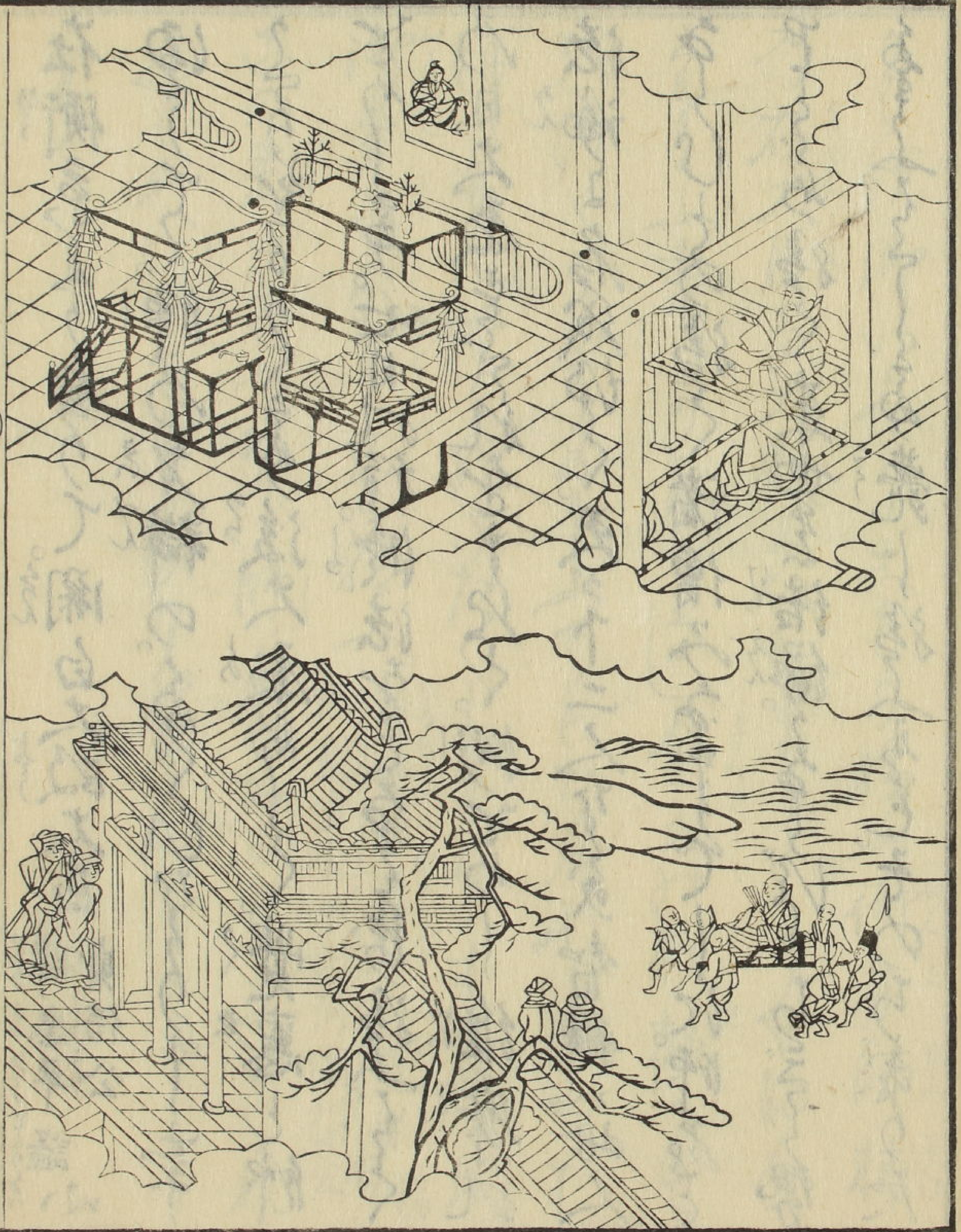
とかくまかるまゝ日灯物語乃はじめてよ。此
沙弥法器なりといへども。師にとくまみえず。ゆゑに
いひしゆう侍らぬとて。ひさしく侍りて
されば常にハ。良見とてあいれし折ひの庵りて
大臣殿に法事申せば。やがて出家しいと何って
しまゐたり。恩訓律師と以ふ人を師として
受戒あつかりしの人だ。師乃いとく大だ
庭の御めぐみにて。木叉素願と成しぎん
のびハいへんとくまつく侍戒

既よ理仙を師として。年頃ありさむ侍りし。且
今恩訓を師とせん事。戒にあらざと。傷蛇痛
鶴も矯志とけとれ給い。人倫に於けるとも
との給へバ。やがて給はく。いと安のりしくある
紀かくいもを侍されど。恩訓ハただ受戒乃ともあ
みしてはしるに師にハあらざされバ。なれて給はし
むよいかしとあつらべふとあらへ給ふ
くされから三帰五戒をうけ給ひて。諱
と良源と号し。のち尊意僧正に

濟々しく。登壇し。喜慶覺恵雲晴の耆僧碩徳のあつまり周旋し。顯典密墳さらあと後つどとふる事なし

承平七年乃事とよ。南都に維摩會と
こゝなはれ。勅使ハ左大弁藤原在衡しられん。
抑此法会ハ。扶桑第一の大會にて。諸宗の
碩學。競望して。智鋒をまじへ。学刀双び
をしる。法席ハ南京の梵刹。其徒八万あまり。麟
角たり。講匠ハ北嶺の老英にて。衆三千の鳳
毛なり。されバその様たぐひなく。佛法の深
奥をあらはし得。南北の人をあつさんど。師その
うちの。一人として出るまきに此義昭といふ人ハ

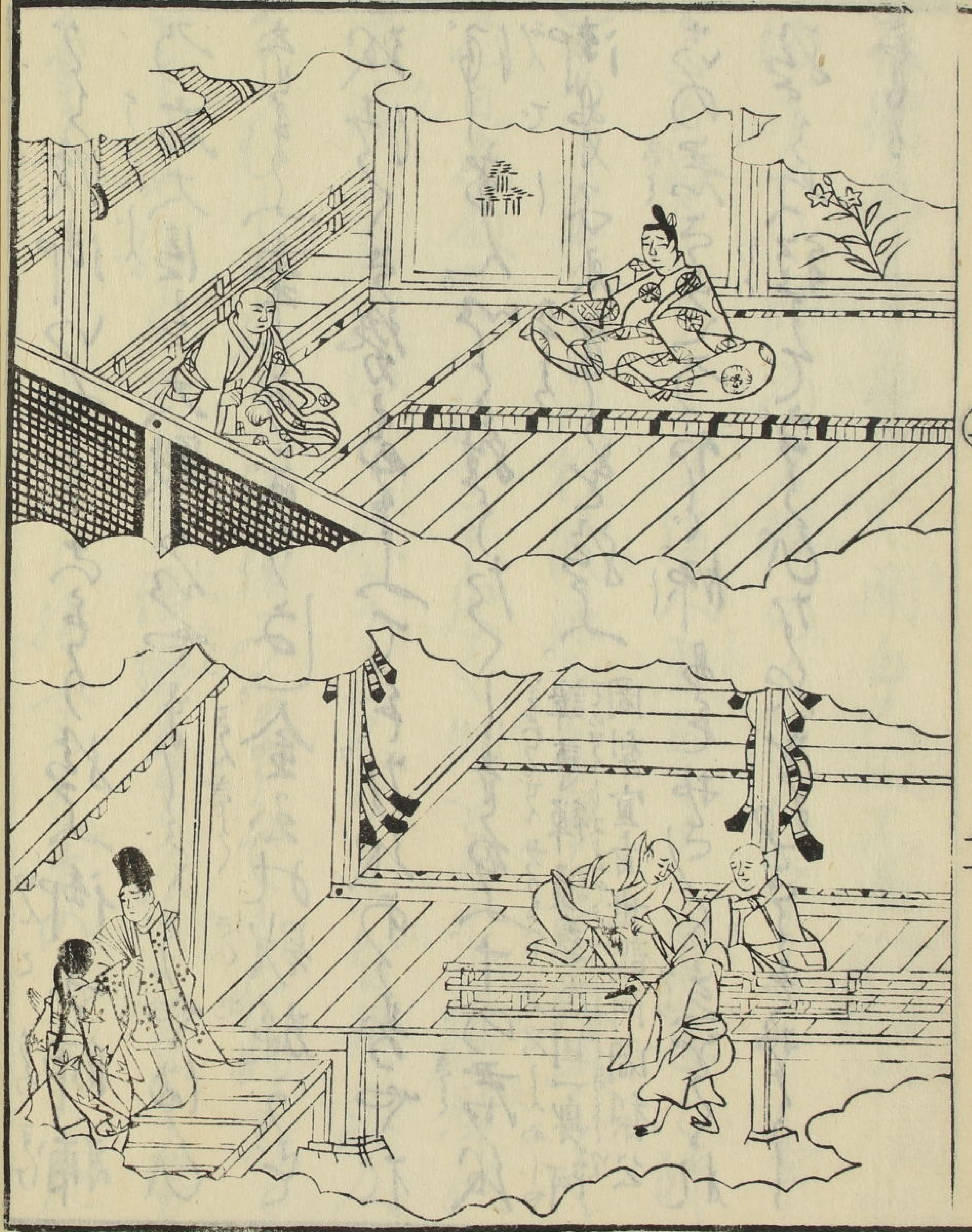
なしびかるに。高徳の碩學ありて南都の義
談より。底ね議して師を法のほまんとせし。昭其
いまく我徳藏の外とも私ふ任しかの少年
の僧。いでゝ我偶あらんや。まくはしくふうあらひ
ど。あらく其仁數よして人。昭すよ云ふ。源ハまし
せし人どあらん後戈英徳よ人乃ゆるを所なりき。
不在年高在性霊と云へり。以らんぞよるひまん
老少をもとづいんや。といふ。わしく偶講ハ年
城六群乃二氏面は多し。杖をもち踏をこう



ていはく。汝が学猶いまだ黄吻なり。わが昭公にわざ
有ん事。蟷螂當轍恃長臂に異ならず。いつて須
けれ。若詞理一言も不明ば國に恒刑あり。竹
林婆羅門は目連にとかれ數是先跪するぞや
として師が中にこし。師ハ情を經して括しそれ
あらゆる事もみんなど辯河すとくしづか須
事なく智月いよく明かりけり。勝筆空にわか。
靡陵にうつはければ六群杖をとるげ。てみとまわきそ
先言とはいふられ。

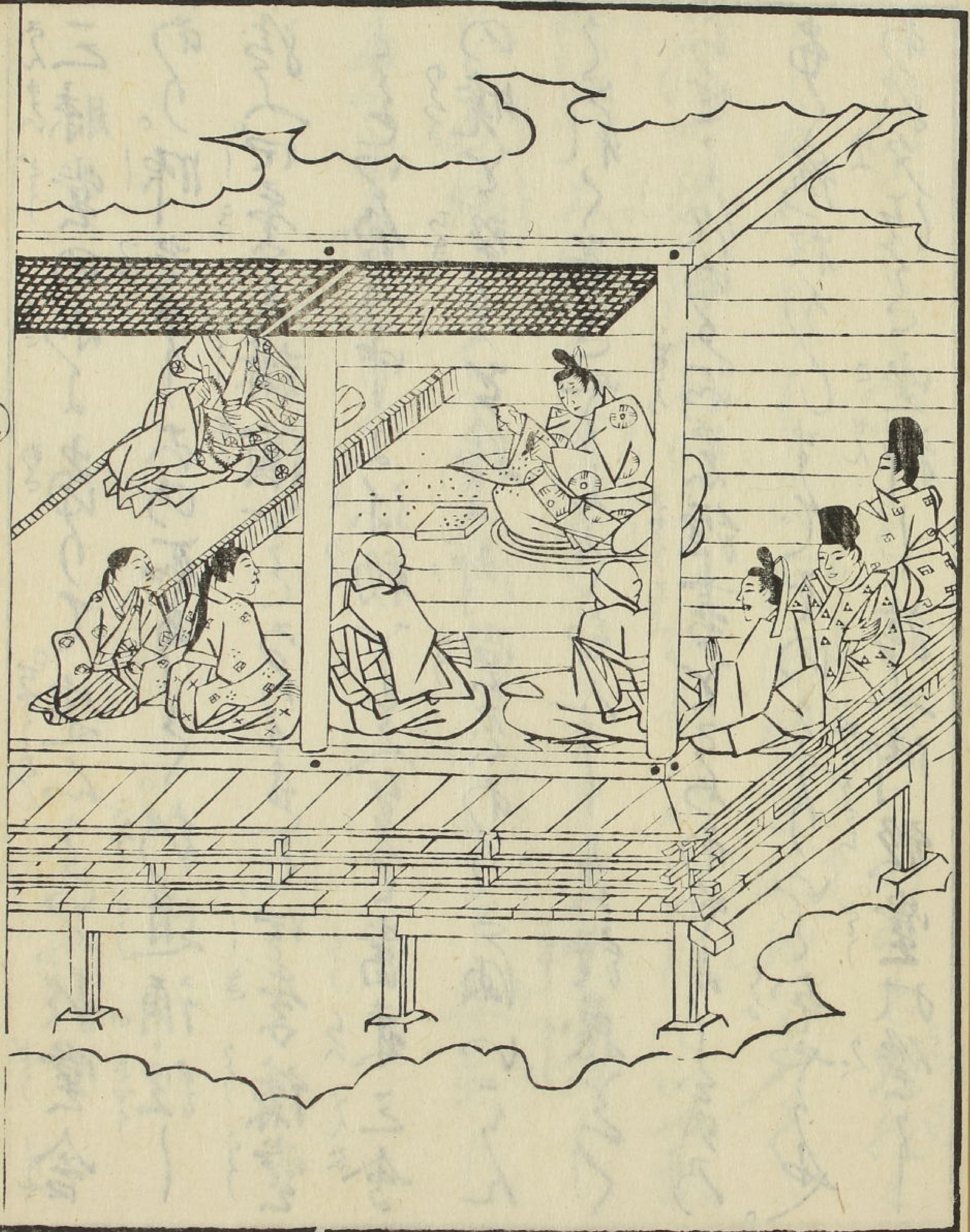
在衡京より参りて関白太政大臣（諱忠平 諡小 貞信公）
に師の才辯のめでたかりし事
をかたるに。後大殿にも覺恵と師
をめし寄。七日の祖師法をとりおこなはせ給ふに
の日。大殿さゞれをすなはち。師をめし。維摩の
法論に名残ゆゑ。天が下二人なき智辯は此人
なりとの給ふ。諸僧みなましに。師をと
ぶらひ給ふ。来世まで結縁をむすばんとちぎらせ
給ふ。なかりしかば。艶じ給ふにも。そのちぎりた

ぐゝ次御いのりをなし給ふ。御子師輔
の右大臣も大殿にならびやむごとなきうへに
きよきの事。いのりしは金玉の財施のほど
似たくさ勢ひはまされてなかなかあまりやあ
ぼしけん。此を継たくしきあへ十の君は
御弟子になしまゐらせ給ふ。（諱尋禅 諡慈忍 因一身阿闍梨宣旨世謂阿闍梨公）
此の君さこそのこと師のもとにさしそへられ
給ひね。師ぞてうびなきものぞおぼし
ける



此ごろはや戒壇破壊し侍れども衆徒力なけ
れハ修する事なくして年月を送りしに近江の
国浅井の郡ハ師の故郷なれバその郡司とかく
尊敬しけり。或時師を請じまゐらせ僧膳のまう
けとて捧ます人ありて大豆のすあへたるを出らん
ども師ぞそくいし給ふとも見せ給ハで郡司の
内々のおとなしきものなりけれバふかくみく
よくたしなみたりしに師の曰されくるしからず
ふたゝび酒をやめ給へとあるにやあらんとも。たゞさ

こゝろえんとありければいそぎけるまゝに有(あり)べきことならねば
なり。我(われ)ちかごろなれば見(み)し事(こと)はなけれど戒壇(かいだん)はさまで
あまたれば、やまと戒るけるに大豆(まめ)をまかせけるが一間(ひとま)ばかり
のこそ居(ね)給ふに一度(ど)も地(ち)につかで、たゞ給ひたり。柚(ゆ)
然(さ)れば孫乃あそび、今志(いま)はかりあへしかずしてかくすゝむ
やうよたるとぞ。たゝきあへてもらし給ひけれど地(ち)しげし
もゝとて皮中(かはなか)までたゝきやぶりて給ひたる郡司(ぐんし)これ
ここそのうれば、人夫(にんぶ)を召(めし)て、祖(かど)ありく戒壇(かいだん)つくる
なるべしとぞ。宇治拾遺(うぢしふい)物語(ものがたり)古事談(こじだん)などにもみえたり

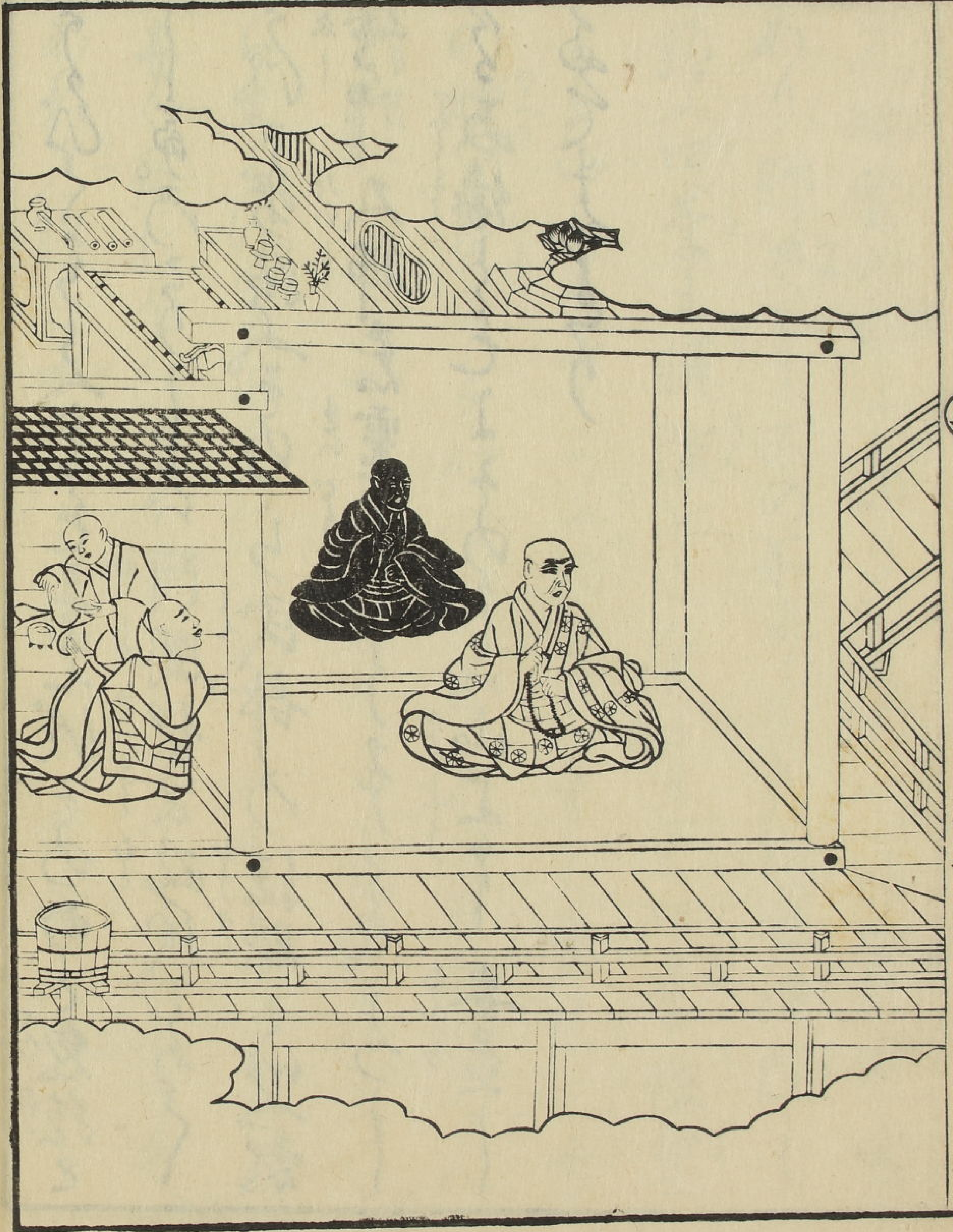


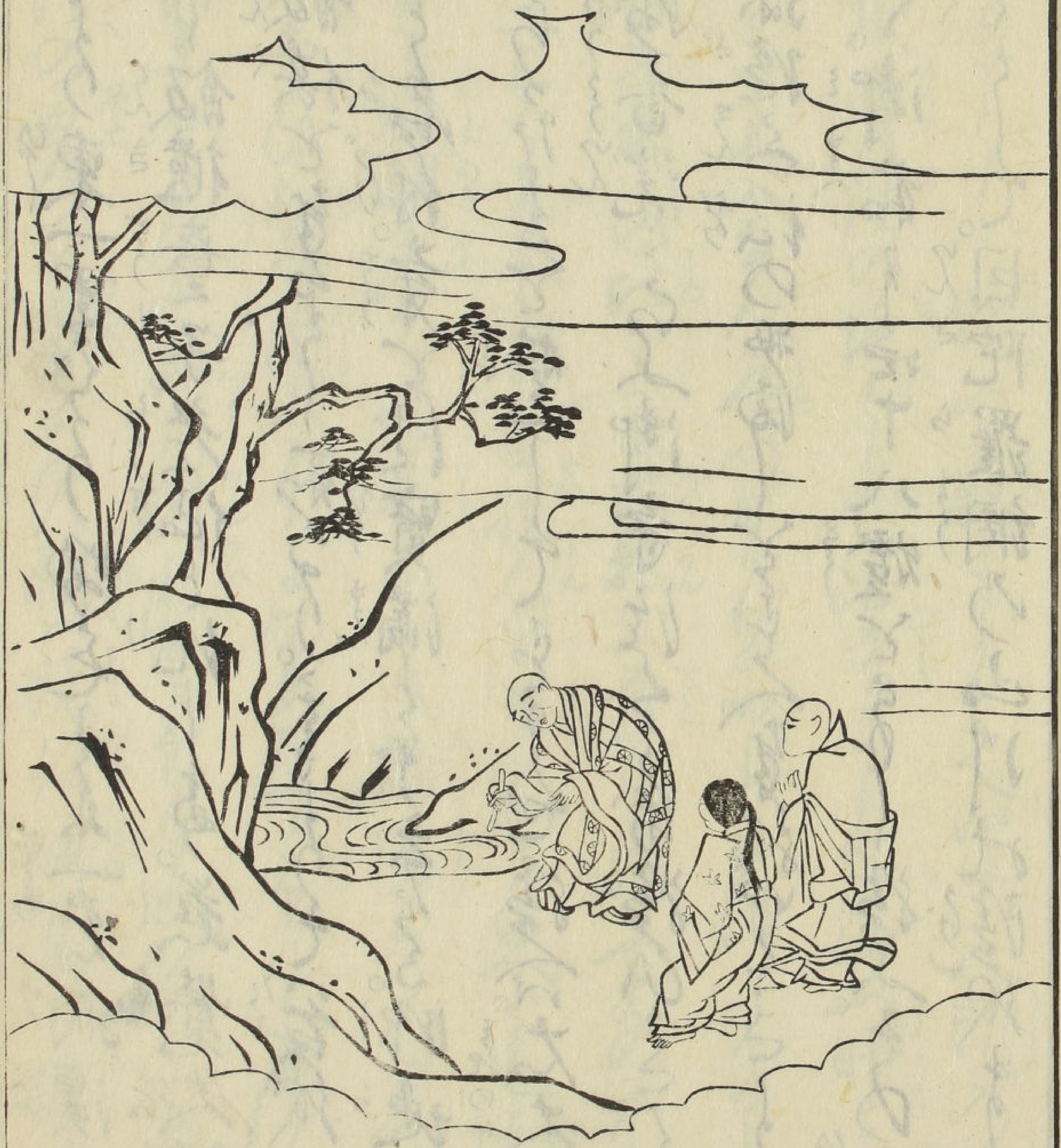
天慶九年の比ほひ右大臣殿楞厳院に法花三
昧堂をたてらるとてみづから燧をうちて誓ていはく
我ねがはくは三昧の力により家門末の代まで栄へば
此火二てひつけるもしとて燧を打給へば二度まで
にも及ばず飛出るかの消堂をりけぶにちりみだれ
なれバとて挑しく掻さされてまつる長明灯と
燈されし九条殿の御一ぞう末の世まで栄へまさく。
今にいたるまで摂関の職をすゝミ大やまとの助となり
かゝる法験はむなしからざりけるとぞいひつたへ侍る。

三昧堂の北に当りて定心といへる堂舎
あり。師常に此の所にして。行道誦経し
給ひ。四季に講演ありしかば四季講堂
とも申すなり。中にも弥勒を安置して当来三会
の暁を契りを給ひ。御堂なりしが夜にいたりて
くされくあざやかなりしが。もんじかし経蔵となし
らせられたる所の経書とこそ。あやしきかみの
事に給ひ校ひすでその。かざり以て見るやも。
あり朝夕ここに坐禅し給ひ。御殿堂に籠り

うびくちにてやけもえたれば。そのあと忽然と
しまのこりしかば阿闍梨公顕紙とかく
られしが給ひその。民部の法眼と以く數
繪師。大師の霊告をうけ参りしかば。うつし
なる尊像とてもよそのはか山より。安置し
あてまつり

四季講堂よりおし下り。奥定とて院地
あり。師は福見まし小さくすまひ給ひ。幽邃寂
莫として。三静慮にもあへねべかりしが。奥定
とぞ名付給ひぬ。この院のかたはらよ。ひとりの手
の志づく小野のかむろより此山の井あり。緑水
清く甲ふ。ひとしきもさきむれ人すく。苔痕
無ふ生ひ。草延井筒紙ふ書しく年久し。
或とき此師より給ひ。独鈷をもて堀給ふに。
濁水あらはし化変じて。醴水となり。その味ひ





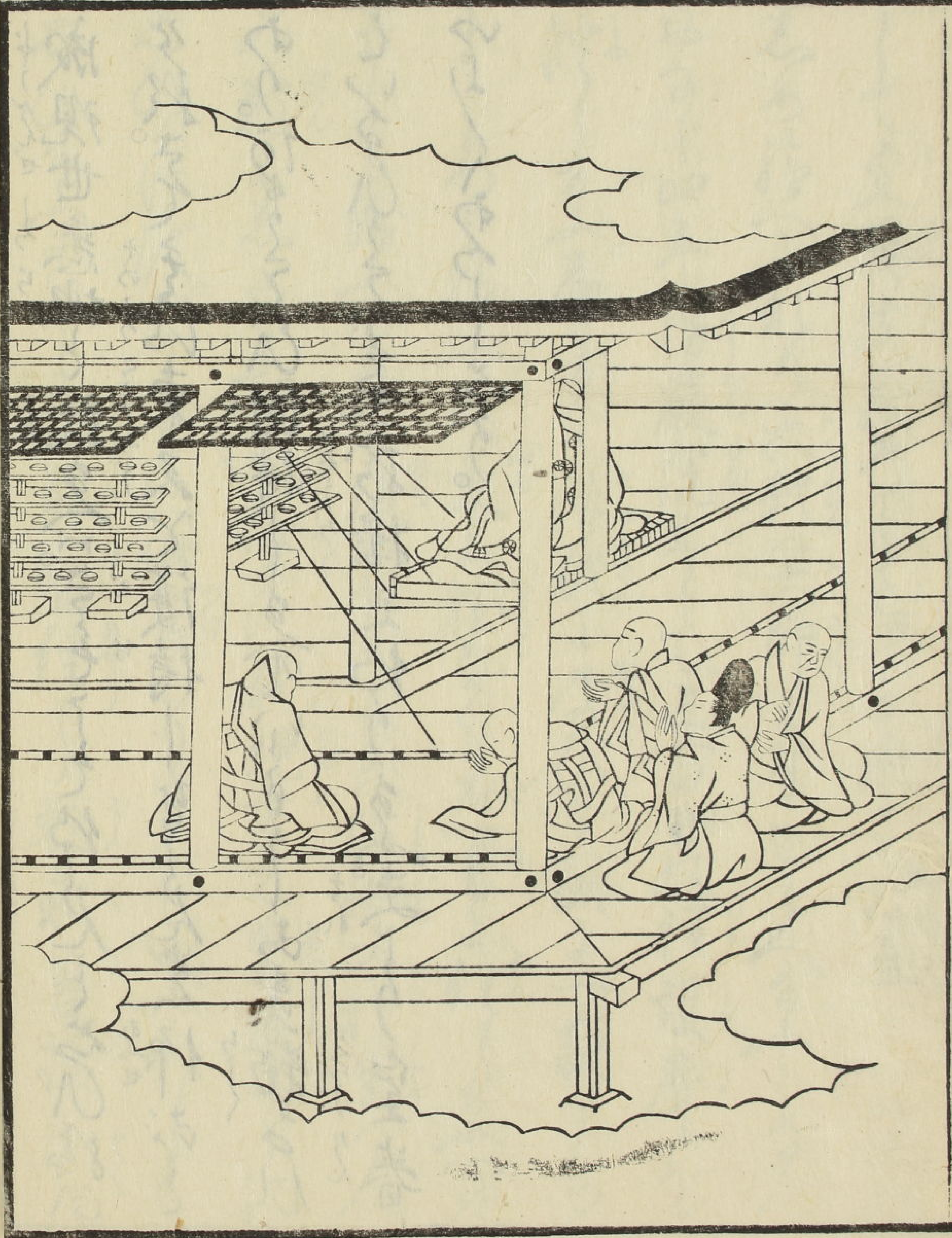
あさやかめしく。九夏乃炎旱おもてをはらうとも
ゆかりしく立よる人は三伏の暑をわすれ。玄
冬の寒き翔をもいとあつくおぼえて。おぼゆ
この。温泉のあたゝかなる事がごとし。されば此
河の井よせ来りたまふ如法水にあらずして。
山上二乃瀰水非

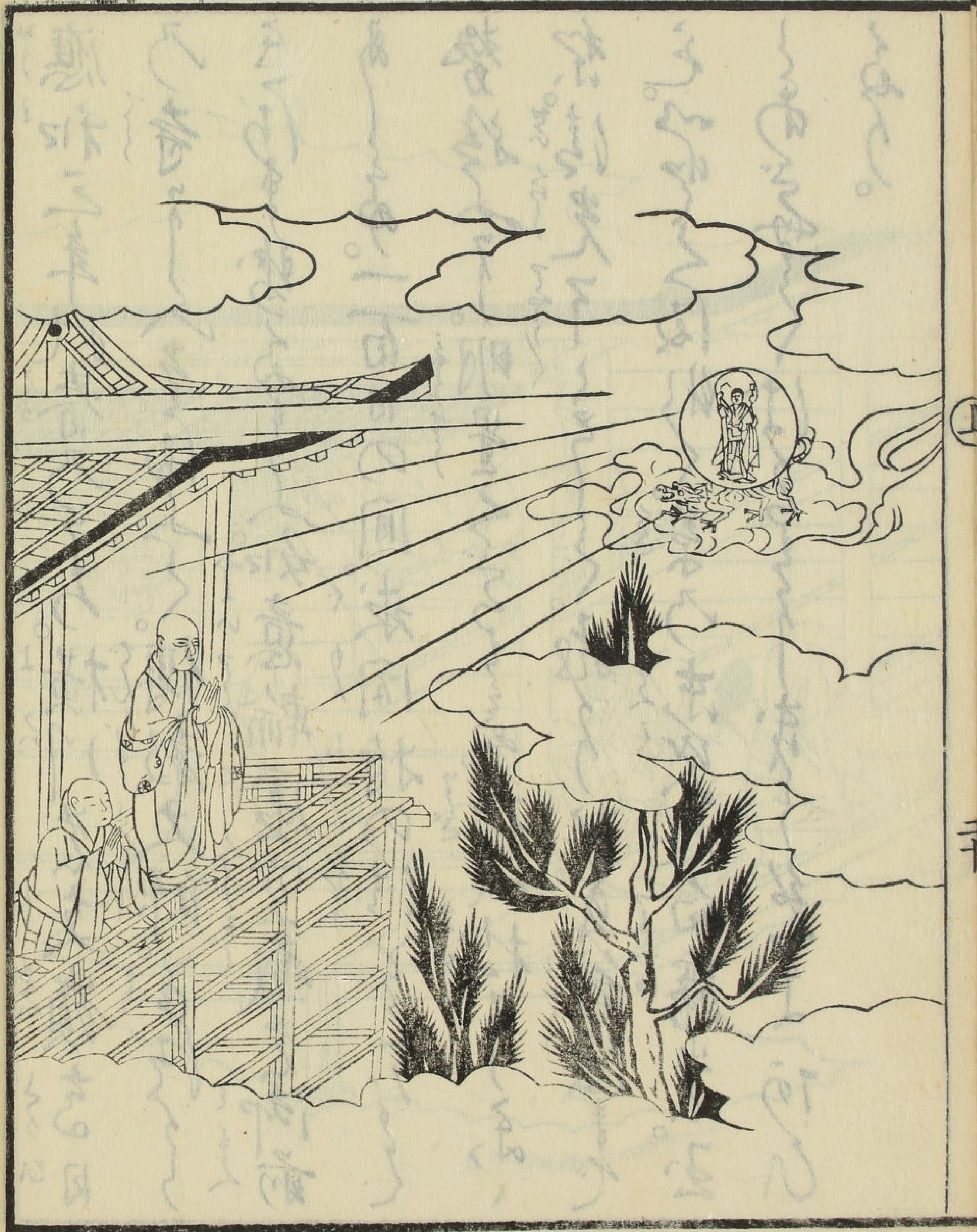
是より東一里ばかり坤もとに一の洞渓あり。
むかし飯櫃童子老仙と化し、慈覚大師
に飯供をまゐらせし所なりとぞ。依て飯
室と名付寺をば宝満寺と云る。師地の
平らかなるを愛して止まらせ給へば、左大臣
殿妙香院といふ御寺建て参らせ給ひしも
弥陀仏の坐像一躰安置して、ことに
みぐしの御前に四十八燈をともし給ふ。その光
煌々として因陀羅網の山川に映じけむ

妙なりけし。燈の数によつて四十八所の庄
園を此膏油の地として此寺に寄せ給ふ。晴より
くらき夜へ入ぬれば月の日のかはり世を照しけるとぞ。
天暦二年の比より六郡を発し給ひてその中に
我十二三ばかりなる菩提心を起すとも悲母
山もとの祖胡夕に孝養ふかく論場にのぞみては
顕密事ひ智を闘はす中にも宝を得ることになりし
にあまねく知られけり。外へ衛名をもつて内へ
弘法の思ひをなして願ひは諸仏願を擁護

して文論文義のさまたげ永く三毒となれし
示し給へと形り六根ハ六即になぞらへまゐらせん。
かくて四年楞嚴院にして三百日の護摩を
修しまゐらせ。厳しく結願におよびて数に一秋うち
ましませ給ふ。御夢に経なく座主に信じまゐらせハ苑
よしと給ふ。ゆめて後かかりしが。諸佛の利生ハ人
乃縁によるべし。抑られ現世栄進さすに
あひかけバ。いかな事ハ冊告ありけんといふかしく
おもひなされど。稲蘇喩経に。勤求菩提即
成現世悉地と説まへバ。さもこそ仰んとおもひ給ひ
ならさて其頃東叡を護持しまゐらせん仰おこと
あり。かかるおよび固辞しまへども。いとりもの勅ありし
じいかひかくて。翁楼に仰りまふ。それより皇眷
いよく厚しとぞ。

應和三年の春のころ。横川の東嶺なる日
の寺にして入定の後に傳教大師。手づから
きざませ給へる如意輪虚空藏の御前
にして一百日の間。求聞持の法をとなへし
勢給ひけり。明星くだりましまし。杉の枝にかく
れ、清光すさまじく。残りなき谷陰まで
も。昼のごとく夜明く。草の末葉の白露まで。玉
とあざむくばかりきらめき光をはなち
けり。

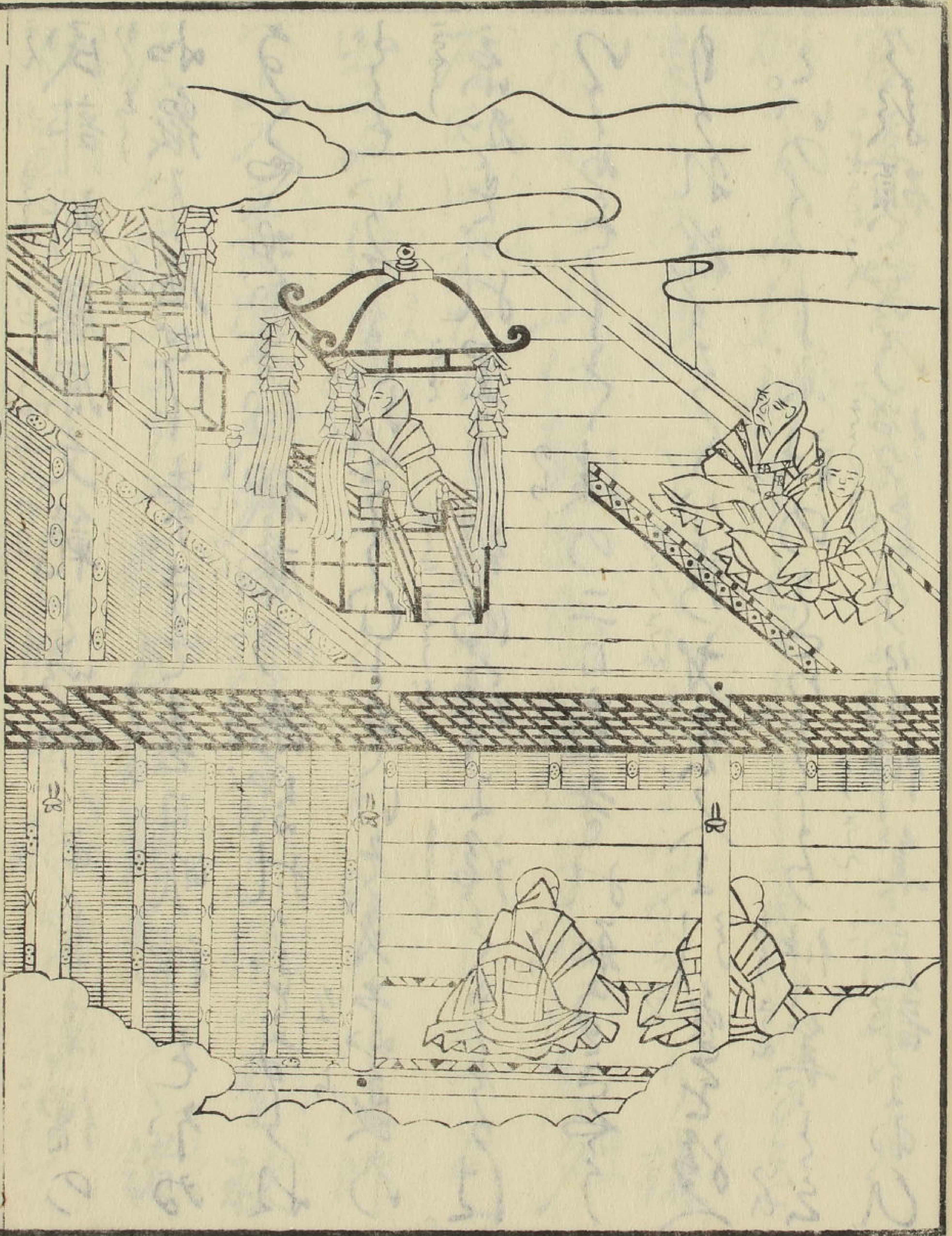




應和三年八月廿一日より。五日が程清涼殿にして。南北の雄才の僧をめし。御八講をおこなはる。講師を公請よりえらび給ふ。第二日めの夕座は覚慶問者にて。法蔵導師なり。定性二乗永不成仏の義を立る。覚慶は皆成仏の道理にて難じて[illegible]。法蔵詞辯をつくせども利あらざれば覚慶[illegible]して。来難をおそれて恥し。師わが胡座の導師[illegible]しが。慶の座せる紙をさく。[illegible]

く慶ありかりしかバ。法蔵楞伽。深密ハ金文
瑜伽唯識乃論旨を守て。又性各別の義を
とる。師ハ無一不成仏の法華ハ妙文に溢るを。
真如薫習乃源自を談じ給ふ。其論争ひに
屈を取事なく。詞林の花あざやかなり。義天の
月ひかりかゝやく。同音往返既に夜に入しかど。
法蔵さハいまく決擇座久しくして。寂しく夜
更ぬるあとれ朝座にありひく。此理然るんとて
しらぬ。けふ翌日朝座ハ師の守州なり。

平別といふ人問者なり。法蔵平別にかはりて。
問者となれバ君臣耳をそばだて。氣をのむばかり
なく所より師の問辯。きのふよりもまさりてや
まして。疑氷朝陽にとけ。難塵国風にちるが。法蔵
只にくむかふ言語に師なかなか嘿然たりしと
の給へバ。海が辯ハ如く富樓那にもまされり。
宣ハ其經智誠言をもつてあらんやとて屈伏
しぬ。其時御讃ハ抄あり一人稱美し
百官讚嘆ましけり。智者大師陳王の大極殿



ふしぎ。仁王般若を講じ給ふより。主上三禮し。
百官弾指し。殿を喧しふせとしらね労
御智徳とぞゆゝし。

民部卿藤原文範といふ人あり察。南僧の
衆徒り歴せし事。さて春日明神をかね
てや出さむ。我藤乃末葉なれどすられ
ども、いかでか引ざらむとて、いそぎ奈良乃
京かたざかれ里より行、明神に詣てやらは。
いとねもころに後の二日南寺に恥をさらう
りけれ。猶かたくハ秀才なん人に引を詣ん
ど、いのりしぬ。社のもとのいろいろ。仲算といふ
名碩学乃僧なりける。仲算戸部にあひ。

宮講乃やうを問きるにあらしさ後くらうく
かくりなれ仲算ちぐみしまあらわさ
事との後へバやがて小京にめそくたり。講
庭にくりて仁賀円藝第又日あ朔座夕
座の問者なりし代にかへにゆかりてそて
出きで仲算問れにかうを朝座れ講師
ハ山乃壽肇久座の講師も小嶺の聖教
沙らの給ふ二十あ辯義瞻輝あしく。諸
卿耳とそろこびとて師聖教りうりて

法華涅槃の意有仏性の旨なり。一色一香。無非中道ぞん道理を立て草木成仏の義を宣へ給へど。仲算ハ論家小宗なれバ撰て非情草木を既に依報となし。而正報にあらざれば理仏性具すといへども他依心の義なくして自依心の行仏性なければ実に成仏の義あるじきとすとも經文に證あらばいざ述べしと言辯をこらしくれく難じければ師円覚經の地獄天宮皆為浄土有性

無性斉成仏道とあきらかに誦し給ふ。仲算ハ承り居して暫らく言葉なくてありしに高座のわきより誰ともなくいと尊き聲してかたどり地獄天宮これ浄土たりければ有情も非情もみなしく仏道を成すてんと訓點をとりみろく教へ給ふ。師さればこそ陳善しくいらく此點かの經旨叶ならバ一草一木各一因果なればバ山河大地同一佛性なれバ草木國土

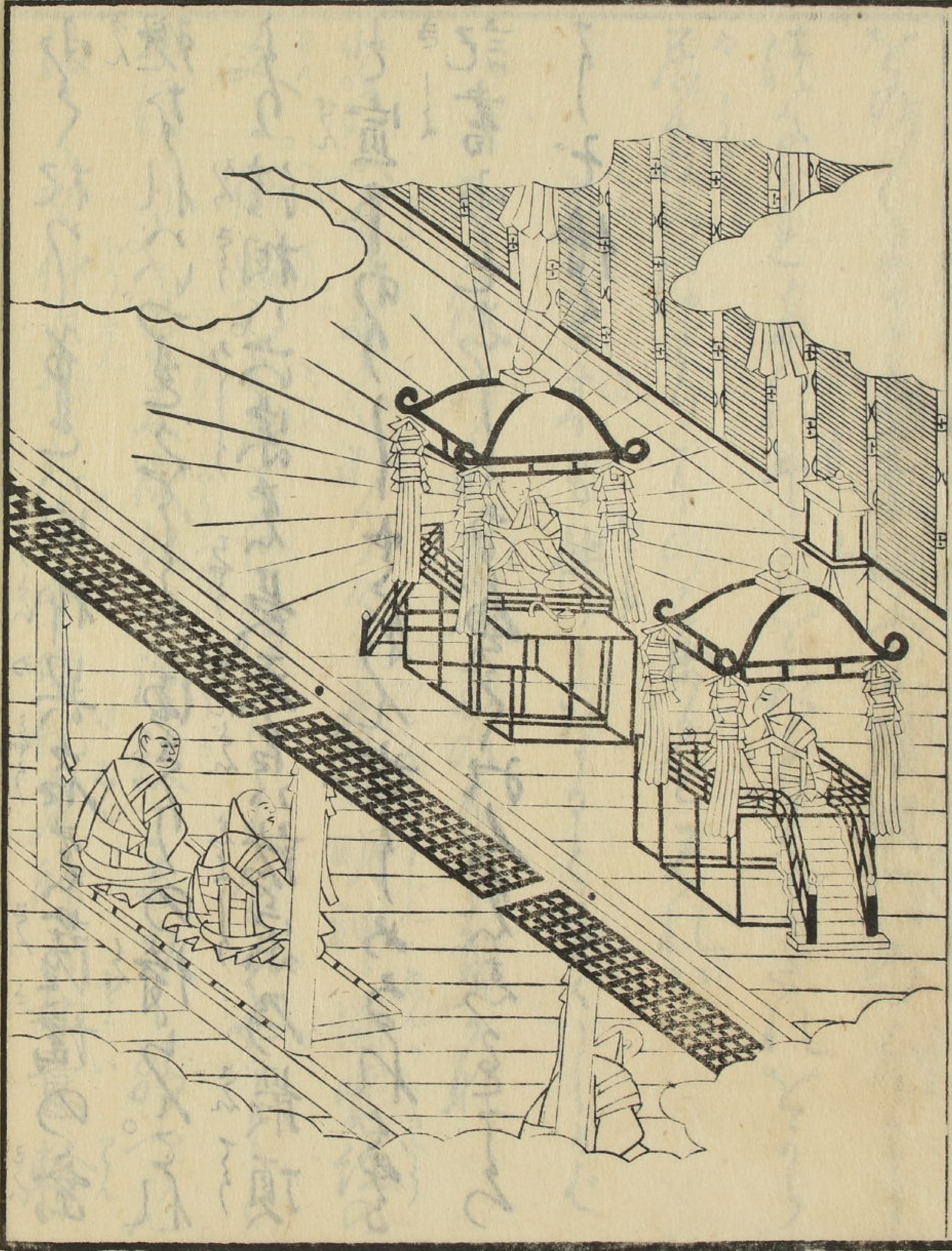
悉皆成佛せり。今汝等に理仏性然具と縁
珠を理仏性然具なりといへども成仏の義な
きゆゑん。行仏性なきゆゑ枚に成佛なく有情を
成仏ハあらじとの給へハ。仲算非情の成仏を
とけまはく自身の成仏を考へ給ひつゝ給ひけれハ。
いそぎ髪をさんぜんとなして師にしたがひ給
黙然としてまた座し給ふとみへしが。香染の
法服へやがて。瓔珞細輭の衣となり。肉身
たちまち化変じて紫金の霊像となり給ふ。

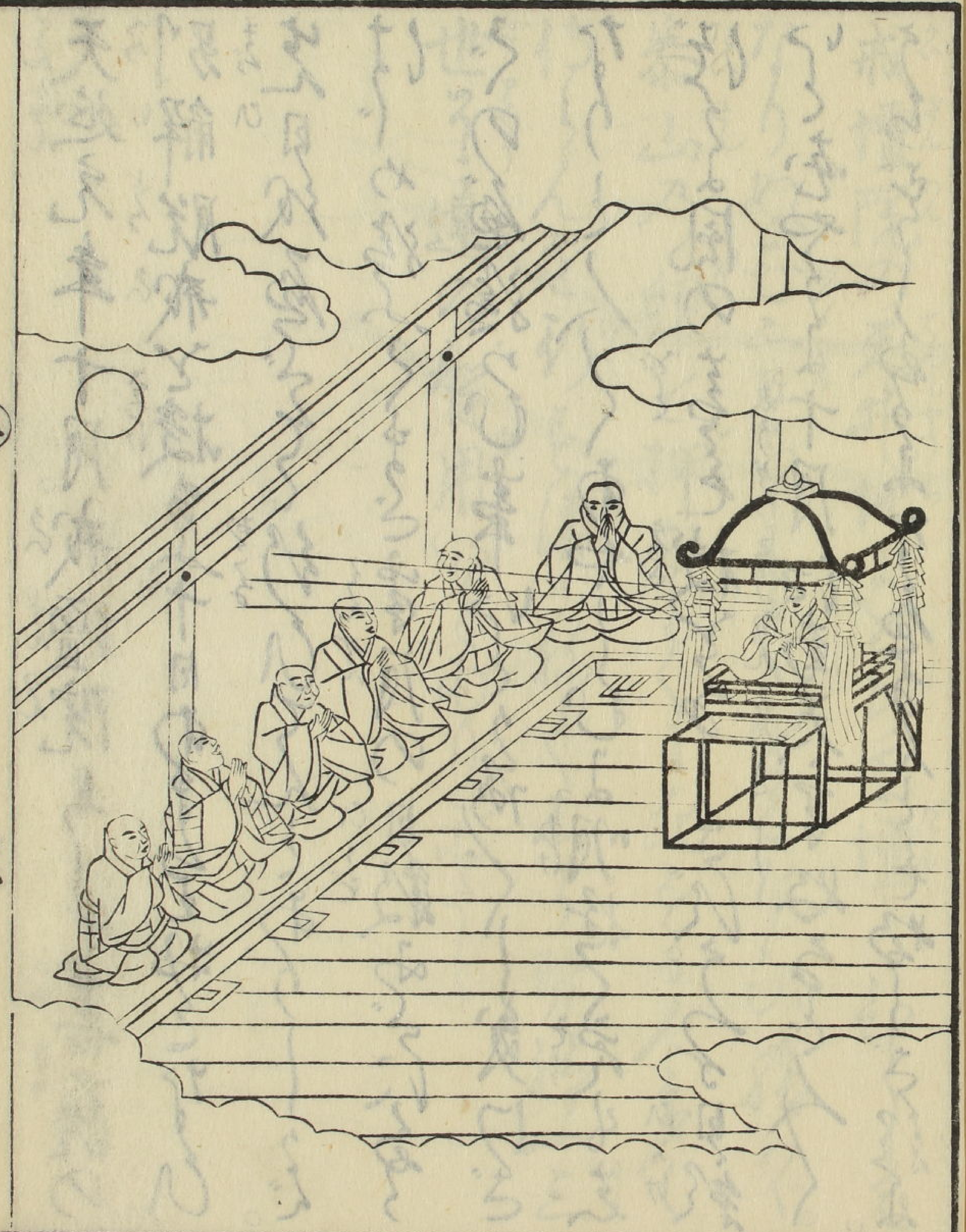
赫くたる光明十方に遍照しけるにぞ。
の紅梅ハ是より色さかへ。二月三月にかゝる
風に繽紛されるに異ならず。三公九卿も身
をうちふるはして生ける仏の御国にいたるかと
なんと覚へける。仲算如意とおもむきて止て
不須説我法妙難思と誦し給ふ時光明たちまちに
きえ。もとのかたちとなり給ひて本座に
戻る。藤氏の人々我慢の心たちまちにやみ。
我氏寺なれバ法論にまけたりとて。

そのくまぐまにあるよ。陽明門の外なり
法成寺の辺にあり牛。車をたてまつらるゝ。されバそのう
居敷のほとりにのこれるを見れバ
草も木も佛になるときこしめしけるぞ
ありがたき身ハ人のなりける
此の寺にあくありける。春日明神圓覺經の
文に。僻點をなさせ給へりしをかへしし
かバしく草木成佛の證議にまぬ給へりん。
済しや仲算も千手の化身師ハ如意輪

ふくれけし菩薩ハ同体異名なる薩埵の化
現なれバいづれもとりまさりの侍らんこれ
より法相ハ六宗なる長天台ハ諸宗乃最頂
と宣下ありしかれバ世にしらるゝれるめる
記書にもしるし。すでに人なることある
りぞ侍る

康保(かうほう)元年大内(おほうち)にいろ／＼のさとしどもおほくて上下もさわぎしに衆(しゆ)徒の師(し)を請じて宮中(きうちう)を護持(ごぢ)し給ふに七日の内(うち)に妖(えう)のさとしぞやみぬ也。またうち内供奉(ないぐぶ)十禅師(じうぜんじ)の宣旨(せんじ)を給ふ。右大将(だいしやう)師尹卿(もろまさきやう)拝まいらせしより作(あふせ)ごと給へり。昔(むかし)も今もならびなき事(こと)になりぬ。同二年にあたる夢(ゆめ)の告(つげ)ありて天台座主(てんだいざす)にのぼり給ふ。齢(とし)五十五歳とかや。安和(あんわ)元年権少僧都(ごんせうそうづ)に任(にん)じ給ふ。又ことし山上(さんじやう)にして無遮(むしや)の大会(だいゑ)を設(まうけ)く。

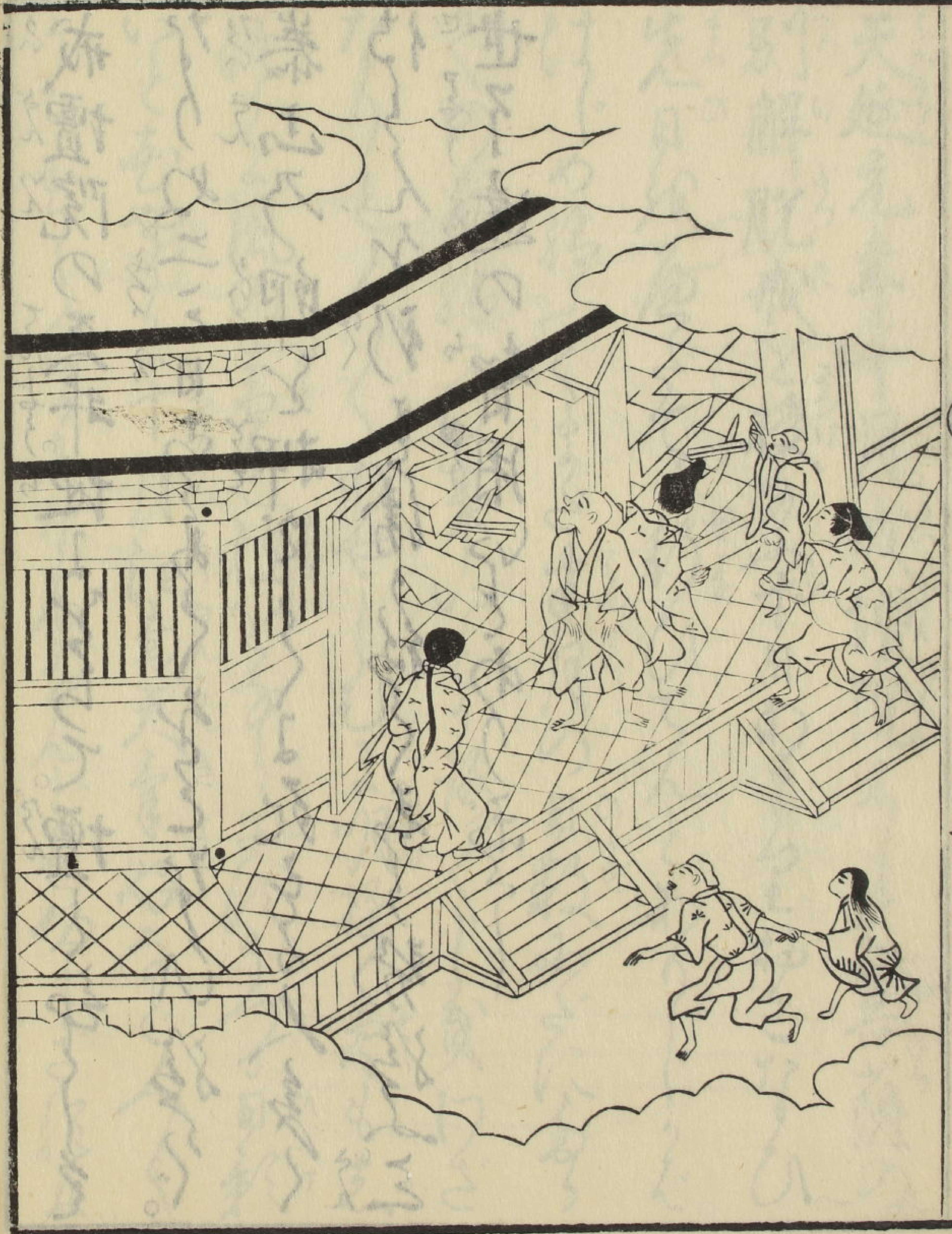




廣學竪義を始めて。竪義は唐より起て
宋の代にいたるまで法義明にしてよ
ろしく侍りける。天禄二年卯月十八日。布薩戒
をはじめ給ふ高座にのぼりて梵網の戒文を
唱へ給ふに御口より光りいでゝあたりを照しけるに
に。南塗を行。太陽の光りもかくれてぞ見
えける。されど年の八月に法務をうけさせ
給ひしとぞ

天延元年十月。戒壇院にして菩薩の
別解脱戒を授かる。十日あまり生こなりし。
先日終ゑぞそて行ひてんとありしかど。
はじめ終ふくまで半月の日数ふかくになりう
ぐの色絶えむ事いとう殊くしき義げざ
なりと。人々くあやしむに明終く光も去
行ふに風の音を枝とありさじこうる日影
いとむやうに十月江南天台ぬきど人々く
うちぞしぬのみなりかんどもやしさ終ぬ。

戒壇院の天井地にをちて壇としを
なりぬ。二三日ありあくなことなすひ絶ぐ。
泰山の卵を押ぐごくに死する人多く
倍らんを行きを濤の絶くえり勢絶ふ三
世了達の智用いとありぶかし



されバ近年感神院と師よ號り。天台の別院と
なる。祭神ハ此神ハ素盞烏尊にて播州にてハ
廣峯尾にして。熱田と號し。又武荅天神と申ス
又ハ牛頭天皇とも云り。陽成のみかどの御時帝
城をまもらんとて。汝をまもれしの武童に化して西
寶ハ我ハ祇園精舎をまもる神なれバ。是を號寺。
欲色二界のうちにある仏法を守れど佛法を
うけて正法とぞ。られ今洛陽にあると聖師よ
むつぶと昔の因縁くちぬと欣び類もなしとぞ。

此れじ三年。大僧都になり給ひ。虚空蔵の
峯に此ゆゑ。文殊楼を建給ふ。此楼は慈
覚大師もろこしに渡り給ひ。五臺山に登り。
生身の文殊にあひ給ふ。獅子のあとに有る
土をとりてかへらせ給ひ。楼を比山に築り。
文殊の像を安置し。そのつちを獅子のあん
足下に置給ふ。そののち思はざるに天災
ありて。楼廻禄せしを。師再び造給ふとかや
さまで給ふ志ろゝに臺山の土も。灰燼

よ御じまいづま殘それしと志つらねバ。樓(らう)ハむかし

より人數といへども。万塊(まんくわい)のうちさりとうれ之へ

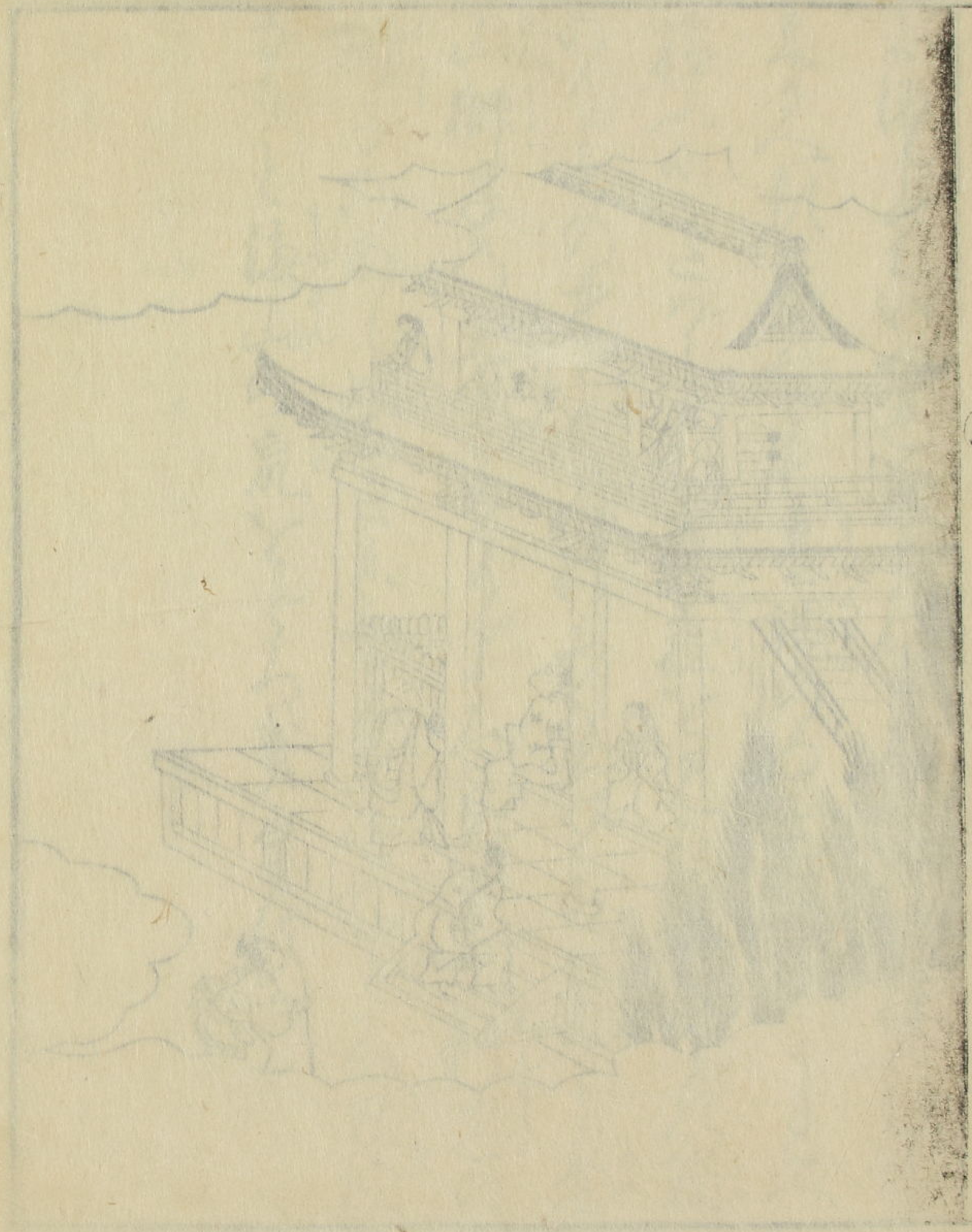
給ふ水。うさりう若寶藏(ほうぞう)と見給へバ。かの箱(はこ)

ありその中よりみちふくろをおわ。上(うへ)より羹(うい)

山獅子(さんしし)獅子乃土(つら)とをりぽくらこび事。旃檀(せんだん)生の

獅子(しし)乃あし此志さよふ歟給へいと不思議(ふしぎ)

ありと凌山(まんざん)の窟(しゆ)をとどろかす聲



U1
3400